

II A-3

ヒト辜丸組織の免疫組織化学的観察

仙崎英人 泉野良夫 螺良愛郎 森井外吉
(関西医大・病理)

主に前立腺癌患者から摘出された辜丸、一部は病的辜丸組織片も用いて、それらのメタカルン固定・パラフィン包埋切片を作製した。細精管基底膜についてIV型ならびにV型コラーゲン、ラミニンなど、myoid細胞についてアクチン、ミオシン、デスミンなど、Sertoli細胞についてビメンチンなど、夫々の免疫組織化学的検索をABC法で試みた。

細精管基底膜にはIV型コラーゲン、V型コラーゲン、ラミニンなどが夫々特異な分布像を示しており、精子形成低下やいわゆる“基底膜肥厚”という病変におけるそれらの変動に注目した。細精管全外周に分布するmyoid細胞にアクチンなどの強陽性所見を認め、精子形成低下でそれらの陽性度は変動減弱するが、それが高度となっても、随伴している基底膜硝子化病変の外縁になおそれらの陽性像をみいだした。なお、アクチン陽性像は精子にもみられた。ビメンチンは細精管内でSertoli細胞々体に特異的に分布しており、いろいろの精上皮病変における本細胞の動態を把握するのに適していた。

II A-4

正常胎盤におけるEGF-リセプターの局在

秋山純子, 川越 厚, 森下 徹, 川名尚
(東京大学医学部付属病院分院・産婦人科)

EGF-R (epidermal growth factor-receptor) は胎盤の増殖, 分化と密接に関わっているが, その存在部位に関しては必ずしもあきらかでない。そこで抗EGF-Rモノクローナル抗体を用いた免疫組織化学法, 免疫電顕法により, 妊娠6-42週の正常胎盤におけるEGF-Rの局在を検討した。

EGF-Rは基本的には, 母体血と直接に接するシンシチオトロホプラスト(ST)の表面に存在していた。胎児循環に近い部位に存在するサイトトロホプラスト(CT)の表面にもEGF-Rを認めたが, 基底膜に接する部分の細胞膜上にはEGF-Rを認めることができなかった。免疫反応産物の量から判断すると, EGF-Rの量は妊娠の全期間を通じて絨毛細胞膜表面に均等に認められた。

以上の所見は①STの細胞膜上に存在するEGF-Rは母体血中のEGFの影響を受けて, 胎盤絨毛性ゴナドトロピン等の産生, 放出に関わっている, ②CTの細胞膜上に存在するEGF-Rは胎児血中のEGFの影響を受けて, 胎盤の増殖, 分化と関わっている等の可能性を示唆している。